

## 定番資料の再考

「雨のバスていりゅう所で」をいかに授業するか



加藤 宣行

### 1. 資料について

本資料は、『ゆたかな心』4年生版に収録されている、主に「規則尊重、公徳心」という内容項目を学習するために書かれた読み物資料である。『私たちの道徳』にも掲載されており、道徳の資料の中では定番と言われるもの1つである。

雨の日にバスの停留所に並んでいたよし子と母親のエピソードである。みんな雨を避けて軒先に並んでいたが、バスが近づくに気づいたよし子はその列を抜け出し、先にバスに乗ろうとする。すると母親にぐいと肩をつかんで引き戻され、結局バスに乗った時には座席は空いておらず、不満そうに「ほらごらんなさい」という態度のよし子と、何だかいつものやさしい母親とは違うよそよそしい態度の母親の姿。その対比から、自分のしたことを考え始めるよし子の姿を描くところで終わっている。

### 2. 一般的な展開

定番資料だけに、数多くの実践記録を見ることができる。その中でも多い傾向が次のようなものである。

#### <導入>

- ・身の回りにある規則はどんなものですか。
- ・順番を待つ時の気持ちはどんなですか。

#### <展開>

- ・順番を待っている時のよし子の気持ち。
- ・ぐいと引き戻された時のよし子の気持ち。
- ・お母さんの横顔を見ている時のよし子の気持ち。
- ・これまでみなさんはきまりを守ってきたか。
- ・教師の説話。

また、大きく3つの場面に分けて考えることが一般的のようである。すなわち、

### ①雨の中待っているよし子

### ②ぐいと引き戻されたよし子

### ③自分のしたことを考え始めるよし子

この3つである。発問は、当然の流れで、この3つの場面のよし子の気持ちを聞くことになる。そして、何といっても最後のクライマックス場面③でのよし子の気持ちを聞くことが、一番のポイントとなるであろう。

予想される子どもたちの反応は、  
 ア. 「自分一人くらい」という考え方はいけないんだな。  
 イ. きまりを守らないとみんなが迷惑する。  
 ウ. お母さんは恥ずかしかったんだろうな。

等々ではないだろうか。

このような子どもの発言を引き出すために、導入や場面①・②での発問が用意されていると言える。しかし、ア・イ・ウの、どの反応も授業の中で気づいたということではないであろう。言ってしまえば最初から分かっていることである。分かってはいるけれどなかなか自覚できない、守れないことを「ああ、そうだ、やっぱりきちんとしなければいけないな」と、人生のどこかで思い直すことも必要であろう。だが、そう思わせることだけが目的ならば、何も45分の道徳の授業を使う必要はないのではないか。

ホームルームの10分間でもいいし、何か「トラブル」があったその場をとらえて適宜指導を加える方が、より実感を伴う指導となり、効果的かもしれない。

「道徳の授業は、カリキュラムで45分確保するというよりも、日常生活で行った方がよい」という主張はその辺りから出ているのではなかろうか。

### 3. 授業の実際

この資料を使った授業を私が行う時には、展開

を変える。展開というよりは発問を変えると言った方が適切かもしれない。

先生が最後に言った言葉は「きまりを守るレベル」でした。考えてみると、最初のよし子さんはレベル1だけど、最後はレベル100だと思います。ぼくも、『俺様ルール』は作らずに、『人様ルール』を作りたいです。1年間、とても面白い道徳でした。本当にありがとうございます。道徳がなかったら、ぼくは『俺様ルール』をたくさん作っていたような気がします。

これは、今年度最後に授業をした時の、一人の男子の授業後の感想文である。その最後の授業が、この「雨のバスていりゅう所で」だった。この『俺様』という言い方は表現的にはあまり好ましいものではないが、子どもたちの心境をうまく反映していると思われるを得ない。自己中心的で他者の迷惑を顧みず、一般的な社会のルールとは一線を画すところにいる人物像と、そうではない人物像を自分の言葉で使い分け、後者のよさを意味づけしている。そして、自分にとっての道徳の授業の意味を総括している。一年の最後にふさわしい授業であった。

#### 【具体的な展開】

では、どのような授業展開になったのかを紹介しよう。(○は教師の発問　・は児童の発言)

○よし子さんはどんな人だと思いますか。

- ・自己中心的、自分勝手。
- ・最初はそうだけど、最後は反省しているよ。
- ・お母さんを座らせてあげようとしているところはやさしいよ。

○よし子さんは変わりましたか。

- ・最後は変わったんじゃないかな。
- ・そうだね、考え始めているね。

○よし子さんは最初と最後で何が変わったの。

- ・はじめは自己中だったけど、最後は周りのことを考えられるようになった。
- ・そう、心が広くなった。

○なるほど、よし子さんの見る目が変わった。

- ・広がったのかな。
- ・うん、最初のよし子は「私」しか見ていない。
- ・そうそう、「私様」。

○なるほど、「私様」か、面白いねえ。

○最初のよし子さんは「私様」か、じゃあ、最後のよし子さんは何かな。

・人…「人様」。

※「私様」と「人様」と板書。

○なるほどねえ、自分のことしか見えていなかつた、考えていなかったよし子さんが、人のことに目を向け始めたのですね。

・そう、「雨の日は割り込まずにきちんと並んで乗車しましょう」というきまりに気づいた。

○そういうきまりはどこかに書いてあるかな。

・書いていない。

○じゃあ、きまりではないのですか。

・きまりじゃないけど、守らなくてはいけないことがある。

○そうか、この「雨の日は……」というのをきまりにしなくてはいけない人と、きまりにしなくてもいい人がいるのですね。

○では、「きまりにしなくても守れる人」ってどういう人だろうね。

・心の中にきまりがある人。

・よし子は最初は外にきまりがあって、守らせる人も外にいた。けれど、最後は自分の中にきまりがあるようになった。

○そういう人だったら、どんな社会をつくることができるだろうね。

・自分のことも人のことも自分の広い心で考えられるから、きまりが必要なくなってくる。

・逆に、きまりがなくても、必要なことは自分の判断で行ったり、ストップをかけたりできるようになる。

○みなさんよく考え、気づきましたね。気づくことのできたみなさんも、きまりがなくても自分で考え、行動できる人になれそうだね。そういう人って、きまりを守るレベルが高いですね。

### 4. おわりに

従来の登場人物の気持ちを聞く発問から、よし子の変容を問う発問に切りかえたところ、授業や子どもたちの反応は面白いほど極端に変わることがおわかりいただけたであろうか。子どもたちは自然に自分の生き方と重ねて語り始めるのである。極端なまでの素直な反応、発想力。そこが子どものすごさである。